〔第2部〕 産科病棟婦長の属性・意識

産科病棟で看護職が業務を行なうとき，業務の内容やあり方は，看護要員数や労働条件に影響されるだけでなく，そこで働くスタッフや，婦長の考え方にも大きく左右されると思われる。そこで，産科病棟の看護に管理責任をもち，スタッフの行動や考え方に影響力をもつ産科病棟婦長の属性と，正常分娩介助者・看護職スタッフの配置に関する意識を調査した。

I 産科病棟婦長の属性

1. 産科病棟婦長の看護資格

産科病棟婦長のうち，助産婦は88.9％であった。助産婦ではなくて看護婦の婦長が10.3％，准看護婦の婦長も僅かながら0.4％いた。

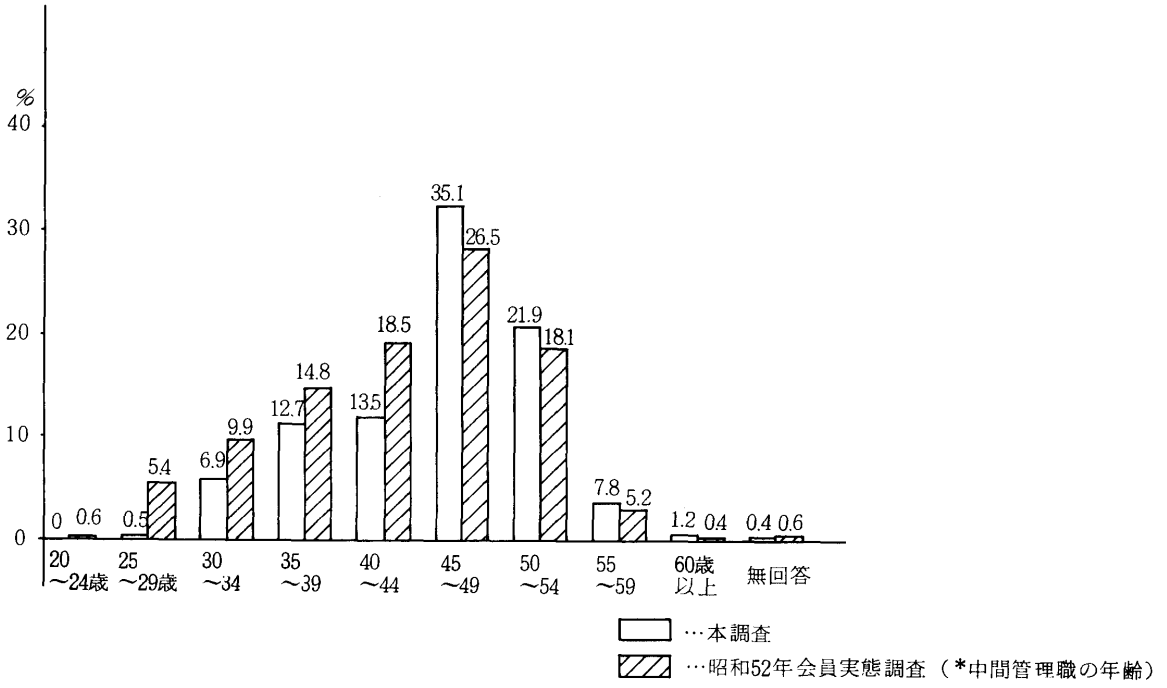
設置主体別では，大学病院（「国立（文部省）」，「学校法人」）の婦長に助産婦が多く全員助産婦であった。

産科看護単位の構成別に婦長の資格をみると，産科独立病棟の婦長に助産婦が多くて，93.8％を占めた。ただし混合病棟でも81.3％の婦長が助産婦であった。

施設の類型や婦長の年齢と，看護資格との関係をみたが，関連はなかった。

2. 産科病棟婦長の年齢

産科病棟婦長全体の平均年齢は，45.9歳である。年齢構成比では，「45～49歳」代が一番多く，次に「50～54歳」代が多かった〔図I－1〕。



〔図I－1〕 産科病棟婦長の年齢

会員実態調査[1]による中間管理職の年齢構成比と比較すると，産科病棟婦長の場合，44歳以下の者が少ない。

3. 産科病棟婦長の専門学歴

新教育制度，旧教育制度出身者がそれぞれ39.3％，58.4％で旧教育制度出身者の方が多かった。ちなみに残りの2.3％は無回答であった。

婦長の年齢との関係をみると当然のことながら，45歳を境にはっきり分れる。つまり，44歳以下では新教育制度出身者が89.8％で45歳以上では旧教育制度出身者が82.7％であった。

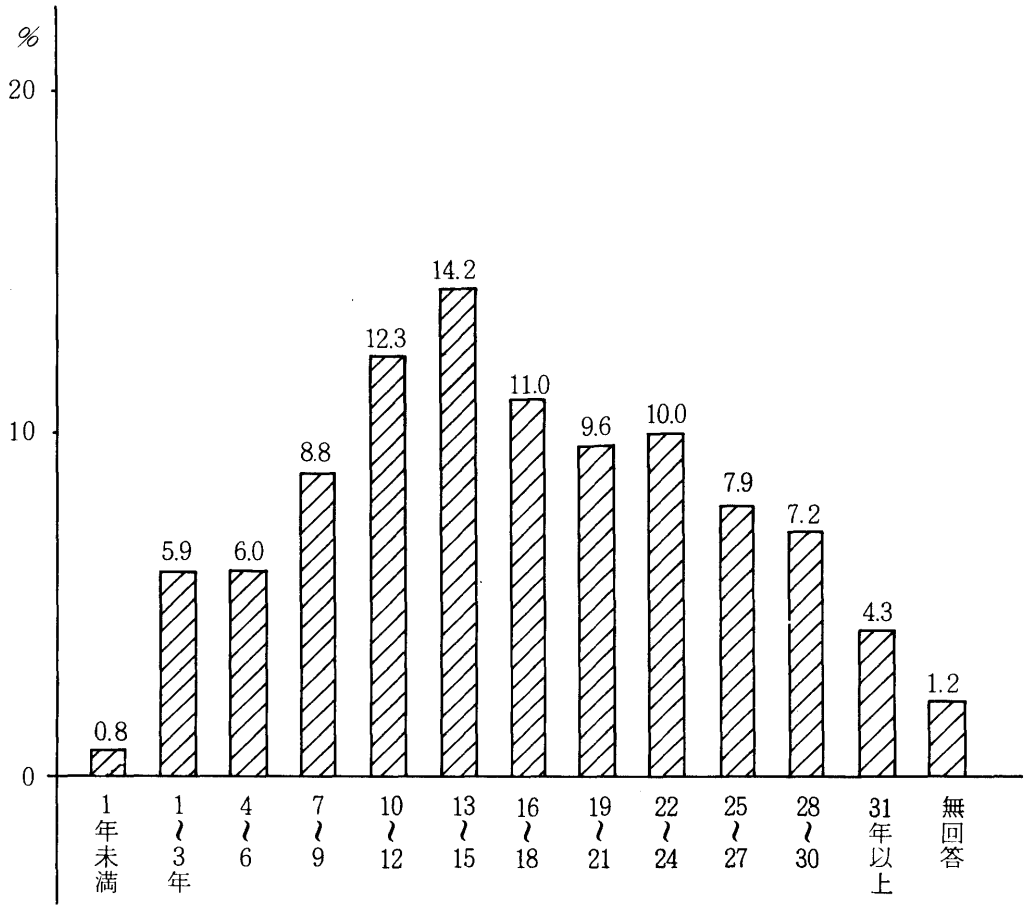
設置主体別にみると，「国立(厚生省等)」，「社会保険関係団体」「学校法人」に新教育制度出身者が多く，それぞれ65.6％，52.4％，53.3％を占めた。

4. 産科病棟婦長の勤続年数

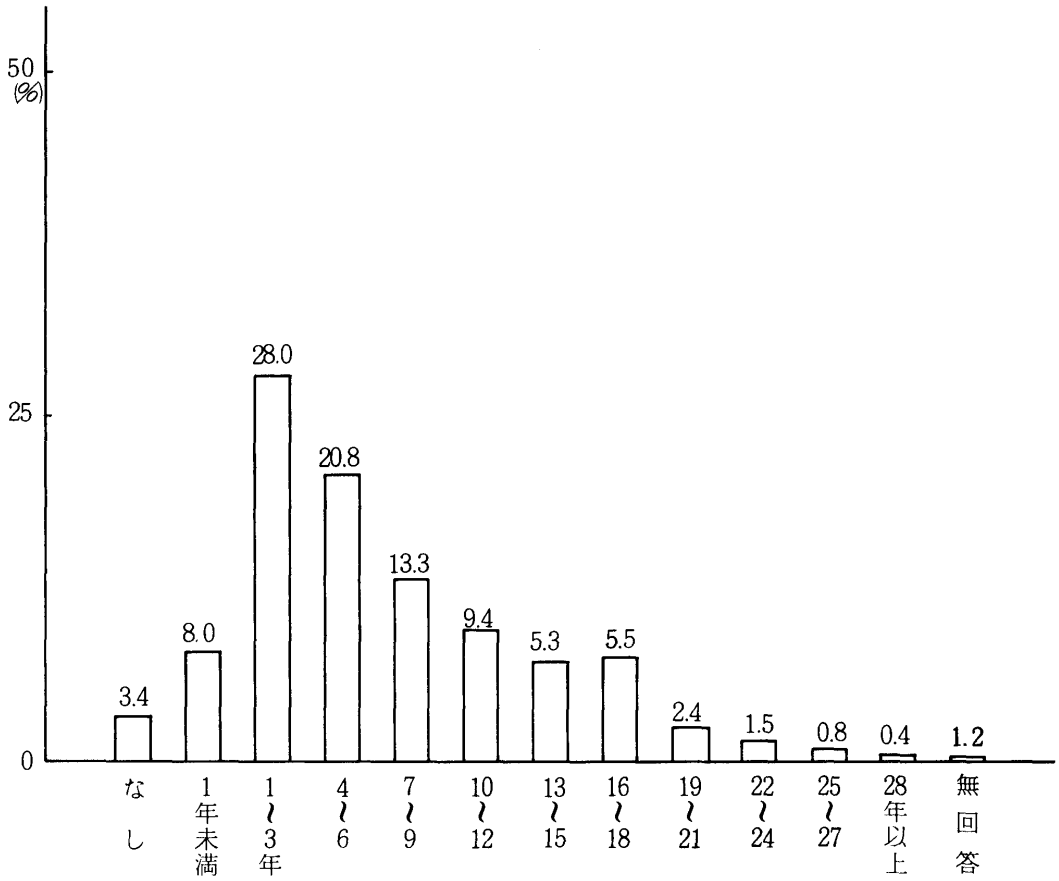
産科病棟婦長全体の現在の病院における平均勤続年数は16.4年である。勤続年数別にみると「13～15年」が一番多い〔図Ⅰ－2〕。

産科病棟婦長としての勤続年数の平均は，6.6年である。婦長としての勤続年数別にみると「1～3年」の者が一番多い〔図Ⅰ－3〕。一方，10年以上現在の病院で産科病棟婦長をしている者も25.3％を占めている。

看護資格別に産科病棟婦長としての勤続年数をみると，助産婦の婦長の方が，平均6.9年と長い。助産婦でない婦長の方はその50.0％が「1～3年」に集中しているため平均が4.0年と短かい。



〔図Ⅰ－2〕 婦長の現在の病院での勤続年数



〔図Ⅰ－3〕　産科病棟婦長としての勤続年数

〔表Ⅰ－1〕　設置主体別産科病棟婦長としての平均勤続年数

設置主体	婦長としての平均勤続年数（年）
国立（厚生省等）	6.5
国立（文部省）	10.5
自治体立	6.9
日赤	8.2
社会保険関係団体	4.5
その他公的病院	5.4
学校法人	7.1
その他私的病院	6.9
全体	6.6

設置主体別に産科病棟婦長としての勤続年数をみると，「国立（文部省）」の婦長の平均が10.5年と特に長い〔表Ⅰ－1〕。

産科看護単位の構成別に産科病棟婦長としての勤続年数をみると，産科独立病棟の婦長の平均が8.0年と長い。産婦人科病棟，混合病棟のそれぞれの平均は6.2年，5.8年である。

注

1）「昭和52年会員実態調査」日本看護協会調査研究報告<No.6>
日本看護協会の会員を対象にした調査。
この調査では，病棟婦長，主任，保健所・市町村の係長等をさして中間管理職といっている。調査対象の4分の3は病産院に勤務する者であるので，産科病棟婦長と大まかに比較することができると思われる。